

## 「落語と私」 その拾八

### 三代目 橘ノ百圓

前号でお知らせした様に、今回は落語と歌舞伎の関係について書きたいと思います。やはり始めに、互いの歴史を比べなくてはなりません。先ず歌舞伎ですが、皆様ご承知の様に、慶長8年(1603年)頃に、京都四条河原におきまして出雲阿国が「かぶき踊り」を披露したのが、祖とされております。只、彼女の詳しい事柄は不明ですが、初期の「かぶき踊り」は、かなり風俗上よろしく無い点が多く、時を経るにしたがって、形を変えて行ったと思われまふ。女郎歌舞伎、若衆歌舞伎と変化をしましたが、これらも、幕府から目を付けられ、現在の野郎歌舞伎へと移った訳です。これが元禄年間(1690年前後)と記されております。歌舞伎は大別して、江戸の<sup>あらごと</sup>荒事と、京、大坂の<sup>わごと</sup>和事に分れますが、江戸歌舞伎は、市川團十郎が宗家と位置付けられ、七代目團十郎が市川家の得意演目十八番を記して、箱に入れた処から、十八番を「オハコ」と呼ぶ様になったと聞いております。その代表に「助六」「勧進帳」「鳴神」などが在ります。来年5月には、現、市川海老蔵が、十三代目市川團十郎を襲名しますが、その時、長男の勸玄君が、現、海老蔵の前名、新之助を名乗る事が決っておりますので、また一ツ歌舞伎界も華やかな話題で盛り上りますネ。テな訳で歌舞伎の歴史は、出雲阿国から数えますと、約420年です。一方、落語ですが、先ず、何を落語と呼ぶかです!人によっては、宇治大納言が祖ですとか、あの曾呂利新左衛門などの、お伽衆が始りだ!テな説もありますが、私は「落語は大衆と共に歩んで来た」を元に、京、大坂、江戸での同時発生した辻噺、これは元禄年間ですから1690年前後、それと今と同じ様に席を設けて、お金を頂いて噺をした、寛政10年(1799年)、山生亭花楽(後の初代三笑亭可楽)が下谷神社で催した「昔噺の会」を落語の始まりと考えています。これは定説としては不安定ですが、前者の説を入れますと、約320年ほど、後者の山生亭花楽を祖としますと、220年ですかネ。ですから、歌舞伎の誕生から、落語が現れるまでの年数の差は、辻噺ですと100年、「昔噺の会」で200年となりますが、この差は落語を語る上で、歌舞伎がいかに影響を与えたかに繋がる訳です。

落語は登場人物が右、左を向きますが、これも歌舞伎が基になっていまして、また、落語の多くは、歌舞伎の舞台を頭に入れて噺しをします。この右、左を向いて会話するのを「<sup>かみしも</sup>上下を切る」と言いまして、単純には、目上の者が下の者に話す時は、右を向いて、その反対が左に話し掛ける訳です。只これは、色々と在りまして、先ず皆さんの頭の中に舞台を描いて頂きまして、舞台に向って左、歌舞伎では花道の有る方ですネ。これが<sup>しもて</sup>下手、<sup>かみて</sup>右側が上手



十三代目市川團十郎白猿の襲名を発表し、あいさつする市川海老蔵さん  
(左は八代目市川新之助の襲名を発表した長男の堀越勸玄さん)

出典：読売新聞 <https://www.yomiuri.co.jp/culture/20190114-OYT1T50007/>

として在ります。ですから、偉い人は？上手側に座って下手に向いて話しますので右を、目下の者は？下手に少しお客様に顔を見せる様に座りますので左に向いて話す訳です。只これは、熊さん、八つつあんがご隠居さんの所に訪ねた時の設定で、自然に上下が分かれますが「妾馬」の様侍が大家さんの家を訪問する時は、入口での立話、例え武士が目上でも、大家さんは家の中からの対応ですから、大家さんが上手になる訳で、仮に大家さんが侍を家の中に入れますと、ここで上下が入換るのです。例えば熊さんが仕事から帰って「オイ、おッ嬢、今帰った」の時は下から上へ、オカミさんが「アラお帰えんなさい」テエのは上から下へ向けて、熊さんが家に上がって「オイ、一杯つけてくれ」テエ処で上手に座るのです。登場人物が多い時などは、芯の人間がシッカリしていないと、頭の中でコンガラガッテしまいます。また「宿屋の仇討」の様に、侍と町人が隣の部屋同士で泊り、その家の番頭が廊下から部屋の中へ声を掛ける時などは、一度舞台の部屋割を図におこした方が解り易いですネ。もう22年前になりますが、春風亭梅枝（現、春風亭華柳）師匠から「文七元結」を付けて貰った時に、左官の長兵衛が、吾妻橋から身を投げようとしている文七を助ける為に、愛娘が吉原に身を売って（但し、佐野槌の女将が1年は娘を店に出さないヨ、との情深い約束をしてくれる）拵えてくれた五十両を文七に投げ付け、その場から逃げる件は、文七は、本舞台から花道を駆け出して行く長兵衛を目で追う様にと教りました。嘶に奥行が出るとの事です。また、歌舞伎は小道具の使い方の勉強が出来る場所です。今では目に触れる事の無い長火鉢、煙草入れ、煙管、紙入れなどの日用品、また刀、槍などの仕草と使い方、“百聞は一見に如ず”ですネ。とにかく、落語の小道具は※扇子と手拭だけですネ！この二ツを、どうそれらしく見せるかです。落語の中には、歌舞伎そのものを演目とした嘶が沢山在りますが「淀五郎」「蔵丁稚」「中村仲蔵」「七段目」これ等は全て忠臣蔵を題材とした嘶ですが、順に四段目、四段目、五段目、七段目となります。嘶の中に芝居を入れたのが「一分茶番」「きゃいのう」「菅原息子」など。こう書きますと、落語が一方的に歌舞伎からの恩恵を受けている様ですが、歌舞伎も落語の演目を数多く舞台に懸けています。代表的なのが「文七元結」「お神酒徳利」「怪談牡丹灯籠」などですネ。年に一度嘶家さん達が「鹿芝居」（ハナシカ芝居の略）テな歌舞伎の真似事を、真面目な顔で演りますが、これが中なか笑いを誘います。この「鹿芝居」の稽古指導には、有名な俳優さんが当たっていると事ですヨ。機会が在りましたら一見の価値在ります。この様に、嘶家さんと歌舞伎俳優さんとの交流はシッカリと在ります。互いに日本の伝統芸能ですから、只、懐収人と顔の造作が大分違いますがネ!? テカ!

### 「落語豆知識」

#### ※「扇子などの嘶家の符丁」

久し振りに「落語豆知識」を書きます。

扇子 = 風、手拭 = 曼陀羅、女性 = タレ（芸者をシャダレ、女義太夫をタレギダなど）、着物の長着 = トバ、羽織 = ダルマ、お金 = おタロ、無論材木屋の“本ロツソレタヨ山木”の様な数の符丁も在りますが、これは、嘶家さんに迷惑が掛りますので伏ておきます。今はこの符丁も余り遣われなくなりました。現代人気質ですかネ!?



出典：公益社団法人落語芸術協会  
<https://www.geikyo.com/beginner/repertoire.html>